

SNSをめぐる子どもたちの 実態と国語科授業の方向性

福岡女学院大学 原田 大介

はじめに

SNSとはソーシャル・ネットワーキング・サービスの略であり、ブログやフェイスブック、ミクシイやラインなどをあらわす。

SNSが学校教育の指導の文脈で語られる場合、主に「①性犯罪や金銭トラブルに巻き込まれないための対応策」「②スマートフォンの使用限度時間」「③子どもたちの人間関係やコミュニケーションの問題」の三点があげられる。

①ではフィルタリング(有害サイトアクセス制限サービス)やアプリの機能制限を子どもたちや保護者に働きかけること、②では、「二十二時以降はスマートフォンを使用しない」などの約束ごとを子どもたちや保護者との話し合いのもとに決めたりすることが教師側のねらいにある。①②③は複合的な関係にあるが、学校現場では①と②が指導の中心となり、③は不十分な状態が続いている。

四%)、高校生(八二・八%)という結果だった。また、竹内和雄もスマートフォンの所持率に関する調査をしている^③。地域によって数字は異なることが推察されるが、この二つの調査結果から小学生の高学年であれば一割から三割、中学生であれば四割から六割、高校生であれば八割程度がスマートフォンを所持していると考えられる。注目すべきは、子どもたちの所持率が年々増加傾向にあること、低年齢化していることにある。今後、小学校の中学年から低学年にかけて所持率がのびていくことは確実であり、前節で述べた①②③に関する具体的な対応が求められている。

また、森永製菓は女子中高生約四〇〇人を対象に疲れとストレスに関する調査を実施している。「あなたは、普段どのくらい疲れ・ストレスを感じていますか」という問いでは、「とても疲れ・ストレスを感じている」(二六・五%)、「やや疲れ、ストレスを感じている」(五七・五%)という結果であり、約八四%が日常的に疲れ・ストレスを感じていることがわかった。「何に対して疲労・ストレスを感じているのか」という問いでは、「同僚・同級生との人間関係」(六一・四%)、という結果が突出して多く、同級生との人間関係に強いストレスを感じていることが判明した。

この調査結果は女子中高生に限定したものであったが、ベネッセ教育総合研究所が行った「子どもの生活実態基本調査」の二〇〇四年版と二〇〇九年版の回答を比較すると、

SNSの普及により、確かに子どもたちは人とつながる上で場所や時間に制限を感じることはなくなった。しかし一方で、子どもたちの多くは自身の価値観と似通った人間関係にとどまり、その人間関係の輪から外れることに対する強い不安を抱える事態が生じている。また、「ネットいじめ」に関する問題は事件が起こるたびに様々な場で語られるようになったが、それらの問題提起や提案は、未だ生徒指導の域を超えるものではない。学習指導要領にもあるように、国語科教育は、「伝え合う力を高める」ことを目標としたコミュニケーションを学ぶ教科でもある。本稿では、③の観点からSNSをめぐる子どもたちの実態をふまえた上で、今後の国語科授業の方向性を考えてみたい。

一 子どもたちのスマートフォンの所持率とストレス

内閣府が実施した調査によれば、子どもたちのスマートフォンの所持率は小学生(二三・六%)、中学生(四七・

「仲間はすれにされないように話を合わせる」と答えた児童生徒は、性別を問わず小中高のいずれにおいても増加傾向にあり、しかもこの傾向は、高校よりも中学校、中学校よりも小学校の児童に強い傾向が見られた^⑤。

まとめると、スマートフォンの所持率は低年齢化していること、SNSを利用する子どもたちの生活の背景には、性別を問わず同級生との人間関係に強いストレスがあり、日々友だちとの話を合わせて過ごしていること、そしてこれらの傾向は小学生により強いことがあげられる。

二 ラインと「イツメン」から考える子どもたちの人間関係とコミュニケーションの実態

高校生が利用するSNSについて総務省が調査したところ、ライン(八五・五%)、ツイッター(六六・九%)、フェイスブック(二四・三%)、ミクシイ(一二・三%)という結果だった。ここでは、子どもたちにもっとも多く利用されているラインを手がかりに、SNSをめぐる子どもたちの人間関係とコミュニケーションを考えてみたい。よく知られているように、ラインには「既読表示」がある。それは、メールの受け手である相手がそのメール内容を読んだかどうかについて送り手が把握できるものである。その便利さの一方で、「既読表示」の機能があるために、子どもたちはラインから身動きが取れなくなっている。それは、「既読」の表示をできる限り早く相手に提示し(相手から送られた文章を早く読み)、相手に少しでも早く返

信することが、互いの仲の良さを証明する行為になり得ているからである。かつて携帯電話のメールの一对一のやりとりにおいて三〇分以内に返信することが「三〇分ルール」と呼ばれていた。しかし集団での会話のやりとりを特徴とするラインでは、「既読」したのに返信しない⁽⁷⁾（これを「既読スルー」と言う）という、送信した相手に無視したと受け取られかねない態度をとることがないように、これまで以上に早く返信する状況に置かれている。加えて、より会話の流れを読んだ返信が求められる。このため、常にライン上でのやりとりを把握しなければならぬのである。

社会学者の鈴木翔が中学生へのインタビュー調査を手がかりに主張したように、学校という空間は権力関係が如実にあらわれる場である。鈴木はその現象を「スクールカースト」と呼ぶ⁽⁸⁾。同じく社会学者の土井隆義が指摘しているように、子どもたちは学校の休憩時間を一人でいる状態を避けるために「イツメン（いつも一緒にいるメンバー）」を確保する必要がある。そしてその関係を維持していくためには、「イツメン」とするラインに参加し、メンバー一人ひとりの価値観が大きく外れることがないように配慮した返信を続けることが求められている。そのやりとりにおいて互いの価値観のずれが続くことが起これば、空気を読めない者としてメンバーから外されることを多くの子どもたちは知っている。これらのやりとりは、たとえば自閉

症スペクトラム障害やADHD（注意欠如・多動性障害）など、文脈を読むことが困難とされる発達障害のある子どもの場合、著しくストレスフルな状態であり、メンバーから除外されやすいことは想像に難くない。

ここで注意すべきは、ラインでのやりとりのほとんどは、互いの関係や価値観をこわさないように十分に配慮された会話であり、互いの内面には決して踏み込まない点にある。「イツメン」とは、自身が一人ひとりの動向を「いつも」理解できる範囲内の者たちのことでもある。このため、子どもたちの他者理解や自己理解は、「私」という枠組みを超えることはなく、また、他者から壊されることもなく、浅く限定した状態が続いていく。もとより学校空間は人間関係が固定化しやすい環境であるため、SNS（ここではライン）は子どもたちを、さらに狭く限定した人間関係へと促進する作用を担うのである。

このような子どもたちの人間関係とコミュニケーションの実態において、国語科授業としてどのような対応策が考えられるだろうか。先に引用した土井隆義は、「ネット依存の本質的な問題は、むしろ日常の人間関係の築かれ方にこそある」と述べ、いじめを減らすための目指すべき方向性として、「緩やかに外部へと開かれたつながり」と「表面的なキャラにもとらわれずに深く付きあっている」ことの二点を主張する⁽⁹⁾。土井のこの指摘を援用すれば、子どもたちの今ある教室内の人間関係を基盤に、そこから外部へ

のつながりを生みだしつつも（教室以外のつながりの可能性を子どもたちと考えつつも）、内部での関係性を見つめ、きちんと深めていくことが（今ここにあるこの関係性をきちんとよりよいものにしていくことが）、③子どもたちの人間関係やコミュニケーションの問題」としてのSNSへの対応策となる。このことを実現するような国語科授業を構想することが、教師や研究者に求められている。

三 SNSをめぐる国語科授業の方向性

前節までの内容に鑑み、SNSをめぐる国語科授業の基本的な方向性として、次の二つの視座を提案したい。

（短期・中期的な視座）

・子どもたち一人ひとりがSNSをめぐる楽しさや問題を見つめ、言語化し、交流することができる国語科授業へ。
・「イツメン」において弱い立場の子どもや発達障害のある子どものSNSへの思いが受けとめられる国語科授業へ。

（中期・長期的な視座）

・SNSを利用した関係性も含め、子どもたちが他者との一つひとつのつながりの意味を見つめ、よりよいものにしていくための具体案について考える国語科授業へ。

今後の課題は、本稿で導き出したこれらの観点を国語科授業として具体化し、検証していくことにある。

引用文献

- (1) 加納寛子（二〇一四）『いじめサインの見抜き方』金剛出版
- (2) 内閣府（二〇一四）『平成25年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 調査結果（速報）』<http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h25/net-itrai/pdf/kekapa.pdf>（二〇一四年七月二九日参照）
- (3) 竹内和雄（二〇一三）『スマホ時代の子どもたちとう向き合う』『中学保健体育科ニュース』大修館書店 <http://www.taisshukan.co.jp/hoai/jr/kikanshi/hoai-news010.pdf>（二〇一四年七月二九日参照）
- (4) 「女子中高生とサラリーマンの「疲勞」に関する比較調査」http://news.infoseek.co.jp/article/atpress_21616（二〇一四年七月二九日参照）
- (5) 「第2回子ども生活実態基本調査報告書」http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009/pdf/data_05.pdf（二〇一四年七月二九日参照）
- (6) 総務省情報通信政策研究所（二〇一四）「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書」http://www.soumu.go.jp/main_content/000302914.pdf（二〇一四年七月二九日参照）
- (7) 鈴木翔（二〇一二）『教室内カースト』光文社
- (8) 土井隆義（二〇一四）『つながりを煽られる子どもたち―ネット依存といじめ問題を考える』岩波書店
- (9) 8と同じ。八四頁―八六頁。